

## 故湊正雄先生の急逝を悼む

私が湊先生と最後にお会いしたのは、さる3月28日でした。この日、日本地質学会の今年度第1回の評議員会が早稲田大学で開かれ私はその席で級友の北川芳男君に会いました。そして、北川君から湊先生が上京しておられる事を聞き、先生とは久しくお会いしていないので、宿舎に先生をお訪ねすることにしました。先生は、29日には北川君と第9次野尻湖発掘に参加されるため現地に向われる由でした。夜も遅かったので、先生とはホテルのお部屋でほんの30分ぐらいお話ししてお別れしましたが、これが最後になってしまったわけです。それからわずか3週間後、先生は急逝されてしまわれたのです。私にとってはまったくの青天の霹靂で、とるものもとられず札幌へかけつけ、北海道大学地質教室の方がた、先輩・同輩・後輩たちとともにお通夜・告別式に加わりました。

思えば、先生は化石研究会創立以来の会員で、当時の古生物学界に新風をふきこんだ総研「化石の微細構造に関する研究」にも深い関心をよせられ、連絡紙『ミクロ』第3号に「系統樹・古地磁気・超微化石」と題する一文をよせておられます。

また、私がお聞きしたところでは、先生の古生代のサンゴ化石のご研究との関連もあつたか、J.W.Wells (1963), C.T.Scrutton (1964), S.K.Roncorn (1966)らの、サンゴ化石の生長線から地質時代の1年の日数を推定し、現在よりも長かったとする一連の研究に、先生は大へん興味をもっておられたようで、先生自ら追試をされ、あるいは地質時代の潮汐力を試算され、機会があればその話しをしてくださることになっていましたが、ついにその機を逸してしまったことは、化石研にとっては大へん残念なことでした。

私が3月28日にお会いしたとき、先生はマンモス研究委員会のことにふれ、「化石研もやっとな国際的な



1976年2月18日 於：東京教育大学  
中陣隆夫氏（東海大学出版会）撮影

ったね。」とおっしゃって大へんよろこんでおられました。またそのとき、この5月に予定されていた中国行きの件についてもお話しされ、大へんな意気ごみを感じました。ご遺族のお話しによると、おなくなりになられた当日も、中国の大学で講義するための下しらべをしておられ、休憩して外まわりに出かけられての遭難だとのことで、先生の机の上には読みかけの書物が伏せたままになっていたということです。

先生はまだ68才の若さでした。まだまだ未熟な私どもを叱咤していただきたかった方でした。心から先生のご冥福をお祈りする次第です。

（東京都立鷺宮高等学校 柴田松太郎）